

児童の心が豊かになるICTを活用した 道徳資料の開発と指導法の研究

～自然や崇高なものとのかかわりに関する内容項目を
取り上げて～

瀬戸内市立国府小学校

〒701-42755
岡山県瀬戸内市長船町福里853

1 はじめに

本校では、平成20年度から「心の豊かな児童の育成」を目指して道徳教育について、指導法の研究を重ねてきた。2年間にわたり文部科学省の研究指定をいただき、児童の体験と道徳の読み物教材を関連させて学習する「関連的な学習」に取り組むことで自分や他人との関わりや集団との関わりに対する心の成長が見られている。しかし、この方法に取り組んでもなお、「自然の偉大さ」や「美しいものへの感動」などの自然や崇高なものとの関わりに関しては十分な効果が見られなかった。

そこで、本研究では、ICTを活用して画像や映像を授業者が撮影し、それにあった読み物教材を開発するとともに授業実践を通して指導法についても明らかにしていくものである。

2 研究の計画

道徳の授業実践は豊富にあるものの、読み物教材の開発の経験者はいない（個人的にした者はいるが）ため、研究の進め方を以下のように考えた。

(1) 従来ある読み物資料の中から資料を選び、それにあったコンテンツを準備する。

→コンテンツの撮影の仕方について研修をする。

(2) 自分でコンテンツを準備し、それにあった読み物教材を作成する。

→読み物資料を開発するために従来ある資料の分析を行う。

(3) 読み物教材とコンテンツがひとつになった教材の指導案や単元構想を作成する。

→関連的な学習の中に組み込めれないか、中心発問はどこにするのか、

開発した読み物教材は授業に耐えられるのかななどを考え、検討する。

簡単ではあるが、一年間以上の様なことを確認して研究を進めていった。

3 研究の実際

(1) 従来ある読み物資料にあったコンテンツを準備する

①映像コンテンツを制作する

岡山県教育工学研究協議会の会員の方々と一緒に兵庫県にある「糸井の大カツラ」を撮影に行った。この糸井の大カツラは倒木からひこばえが出てきて二千年も命をつないでいる国指定の天然記念物の樹木である。本校職員が毎月関西地区で行われている道徳学習会「横山先生を囲む道徳研究会」で紹介された兵庫県道徳副読本に掲載されている『つながる いのち—朝来市糸井の大カツラー—』がきっかけであった。読み物教材から感じるものを映像にしていくことより、実物を見て感じるまを映像にしようと思い、現地で撮影することにした。教師が見たものを映像化することで授業者にもその思



写真1 糸井の大カツラ

いが伝わると考えたからだ。ただ、天然記念物でもあり、柵内での撮影はできないため、限定的な画像や映像になってしまった。撮影している時は、アングルやカットなどを考えたり、大カツラまでの道すがらの自然の様子を映像や画像に収めたりした。それらを持ち帰り、1分程度の映像コンテンツに編集した。さらに、会議を開き、見ている児童に大カツラの神秘さや山の奥でひっそりと力強く生きている様子になるようカットを選び直したりして再構成した。

完成したコンテンツを日本道徳教育学会会長の横山利弘先生に見ていただいた。先生からは、「きれいにとろうとしているが、児童の目線になっていない。」との指摘をいただいた。例えば、児童は全体を見て樹木の部分を見るのに対して、コンテンツでは逆の部分から全体の樹木を見せているという風にある。先生からはコンテンツの見せ方として、コンテンツを読み物教材を読んだ後に見せることも効果があるとのことをご指導をいただいた。

②「誠の碑」の画像コンテンツを使った実践

この教材は、自らの危険をかえりみず踏み切りに入った女性の命を救い、殉職した宮本邦彦警部のお話である。4年生の授業実践者は、実際に誠の碑の写真を様々なアングルから撮影し授業を行った。授業のめあては「輝いて生きるためには」を宮本警部のお話を通して考える内容である。児童は、授業初めに提示された写真は何なのかいろいろと想像をふくらませていた。児童からは、「お墓」、「記念のもの」など意見がでた。読み物教材に導入するには効果的だった。さらに、読み物教材を学習している中でも、もう一度画像コンテンツを提示することで宮本警部の思いに迫ることができていた。最後には、児童が運動会でがんばっていた様子をスライドショーで提示することで、児童自身も輝いている場面があることに気付くことができ、「輝いて生きる」ことを自分自身の中に見つけることができた。



写真2 誠の碑を写真で提示



写真3 スライドショーを視聴



写真4 自分の輝き、友達の輝きを書き込んだカード

(2) 自分でコンテンツを準備し、それにあつた読み物教材を作成する

①毎月一回の読み物資料分析研修会を開催

読み物資料を制作するためには、どのようにして読み物資料の文章が構成されているかや中心発問（授業で児童に一番考えさせたいこと）をどこにすればいいのかなどを授業者が理解しておくことが大切だと考えた。そこで、毎月一回放課後に有志の参加で研修会を開催した。他校にも呼びかけたところ、本校以外の教師も来校し一緒に研修会を行うことができた。



写真5 自主研修会の様子

前述した「横山利弘先生を囲む道徳研究会」でも教えていただいたことを参考にしながら、読みを深めた。その中でも、次のようなことが資料の骨組みとしてあることが分かった。

物語は「道徳的起りの場面」、「主人公が悩む場面」、「主人公が道徳的に変容する場面」、「結末の場面」があるということ。また、中心発問の場面は、「主人公が道徳的に変容する場面」であり、そこには、主人公の思いや考えは文章として直接的には書かれていないこと。

さらに、主人公が変容する場合には、助言者が登場し、主人公の変容のきっかけになることである。これらのことを参考にして読み物教材を制作してみた。

②自作読み物教材「小さな旅人」を制作

自作資料「小さな旅人」は渡りを行う蝶「アサギマダラ」とその出会いを待ち望んでいる主人公リサのお話である。主人公リサは、5年生の時に、岡山市にある芥子山（けしごやま）でアサギマダラに会い、その美しさと渡りをするすごさに虜になる。そして、6年生になって再度会いに行くがなかなか出会えない。あきらめようとしたその時、念願の蝶に出会える。蝶と人間という異なった生き物であるが、主人公は同じ生き物として蝶に接するようになる。そんな主人公の心情を考えながら、生き物の息づかいを感じ、自然の人間の力を越えたすごさに気付くことをねらって制作した。

制作したものを日本道徳教育学会近畿支部学習会でご示唆をいただいた。日本道徳教育学会会長の横山利弘先生からは、数回にわたりアドバイスをいただき改変を重ねることができた。先生からは「蝶を見て感じる心、震えるような感動を書くこと、子ども目線で書き、蝶の説明はいらない。蝶にはじめてあつた時の強さ混じりの驚きを書くこと」などのご示唆をいただいた。自然を題材にするとどうしても説明が多くなりがちになる。しかし、そんな説明をなくし、理屈ぬきのすごさを書くことが本研究でねらっている自然や崇高なものとのかわりに関する内容項目の読み物資料としてふさわしいことが分かった。

また、読み物資料作成と同時に、芥子山に行きアサギマダラの撮影も行った。

(3) 自作資料「小さな旅人」で授業実践を行う

自作資料「小さな旅人」を使って6年生2クラス、5年生1クラスで実践を行った。それぞれのクラスは表1のような条件で授業を行った。

表1 各クラスの条件

学年	道徳の時間の授業の条件
Aグループ (6年生31名)	読み物資料「小さな旅人」を使い、アサギマダラの写真は黒板に貼る一枚(カラー)のみ。
Bグループ (6年生31名)	読み物資料「小さな旅人」を使い、導入でデジタルテレビでアサギマダラの映像や画像を提示し、黒板にも写真(カラー)を貼る。
Cグループ (5年生27名)	授業の前に、デジタルカメラを使って校庭の冬探し、春探しを行い、画像を提示しながら、クラスや班で話し合う学習を終えた後、6年Bと同じ条件で授業を行う。

A・Bグループとも5月に行った道徳性検査(HUMANⅢ)では、道徳性総合における回答は「一般的に望ましい道徳的心情あるいは判断と認められる選択肢」の回答が全国の回答よりも上回っていた。また、本研究に関する3の視点「主に自然や崇高なものとかかわりに関すること」についても、「生命尊重」、「自然動植物愛護」について全国の傾向より望ましい傾向にあった。また、Cグループには道徳性検査を実施していないが、日常の道徳の時間を観察した結果、前向きな発言が多く、自分の思いを進んで発表することができる集団であることが分かった。それら3つの集団に提示する資料を少しずつ変えて実践を行った。

①Aグループでの実践

表2 授業(単元)の流れ

1 教師が資料を範読し、児童は気になる箇所(線)を引く。
2 児童が線を引いた気になる箇所を発表し話の内容の理解を深める。
3 中心発問をし、道徳的価値について考える。
4 今日の学習で分かったことや感じたことなどを書く。



写真6 資料に線を引く児童

授業の流れ略案を表2に示す。児童は読み物資料の中で気になる箇所を写真6のように線を引いていた。線を引いた箇所を観察すると、多くが、アサギマダラの美しさを主人公が感じている場面や少女が再会したアサギマダラとの別れの場面であった。これは、読み物資料の筆者が中心発問として考えて欲しいと考えていた「人間と蝶の心が通うこと、自然のすごさに感動すること」に児童自身が読み物資料で感じられることにつながる可能性があることを示していた。本時では、児童に「手から離れたアサギマダラを見送りながら少女はどんなことを思ったのでしょうか。」という中心発問を投げかけた。しかし、児童の回答はどれもアサギマダラに対して声援を送るものばかりだった。授業後の感想を表3に示す。

表3 授業後の児童の感想(抜粋)

<ul style="list-style-type: none"> ・ぼくもアサギマダラがどれだけきれいなのか見てみたいと思った。(多数) ・蝶や生き物に対して感情が芽生えるのがすごい。こんな蝶がいたら私も少女のようになれると思った。
--

②Bグループでの実践

授業の流れはAグループと同じである。Aグループとの違いは写真7にあるように導入場面でアサギマダラの映像や画像を使用したことである。これにより、児童は資料に登場する蝶「アサギマダラ」に対して主人公に近い目線で見ることができ、関心を高めて学習に入ることができた。また、中心発問もAグループと同じにしたが、やはり児童からは、アサギマダラに声援を送るものばかりになった。Aグループと変えて小グループで中心発問について話し合いを行ったが結果は同じだった。



写真7 導入でコンテンツを活用

授業後の反省でA・Bグループの授業の中心発問がずれているとの指摘をいただいた。これから南へ渡りを行うアサギマダラに対して誰だって見送るときには声援を送るだろうし、また会おうと再会を願うというものである。この中心発問では、それ以外の考えは出にくかったのだ。前述した読み物資料を分析する研修会でも明らかになっていた「中心発問はさまざまな考えがでるようなものに」ということを忘れていたことにA・Bグループの実践を通して再確認した。これを活かしてCグループでは中心発問を変えて実践をした。なお、Bグループの授業後の感想は表4の通りである。

表4 授業後の児童の感想

- ・人間以外の生き物にこんなときめくことができるんだなと思いました。主人公にとっては特別な存在なんだ。
- ・主人公とアサギマダラは友達（親友）なんじゃないかと思いました。蝶だけ大切な友達だと思います。
- ・大切なものは人間だけじゃないんだと思いました。生物、動物でも本気で夢中になれると人間と同じ存在になるんだと思いました。
- ・人間と蝶との間に「絆」があると思いました。

Bグループの感想からは、人間と動物の関係に着目した感想が多く出た。コンテンツがあることで主人公の気持ちに寄り添いやすかったことも考えられた。

③Cグループでの実践

表5 授業（単元）の流れ

- | | |
|----|---|
| 前時 | デジカメを使って冬、春探しをして、話し合い活動を行う。
なぜ春なのか、なぜ冬なのか写真を示しながら話し合う。 |
| 本時 | ①アサギマダラの動画コンテンツを視聴する。
②教師の範読を聞きながら、気になる箇所を線を引く。
③内容を簡単に確認した後、 中心発問 について話し合う。（少人数からクラス全体へ）

「どのようなことを思いながら、小さな旅人を手の平に静かに抱きかかえたのでしょうか。」
④学習の感想を書いて発表する。 |

A・Bグループの実践の反省から中心発問を変更した。本時の中心発問は、山の中で3時間も歩きまわりやっと出会えたアサギマダラを主人公がそっと静かに抱きかかえるように手の平に入れる場面

にした。児童からは、表6のような多様な考えが出た。

表6 中心発問に対する児童の考え

- ・来てくれてありがとう。
青い羽根がきれいだなあ。
- ・私の家族の仲間入りね。
- ・ここまでがんばったね。
- ・君のことずっと気になってたんだ。
- ・やっと会えてうれしいよ。



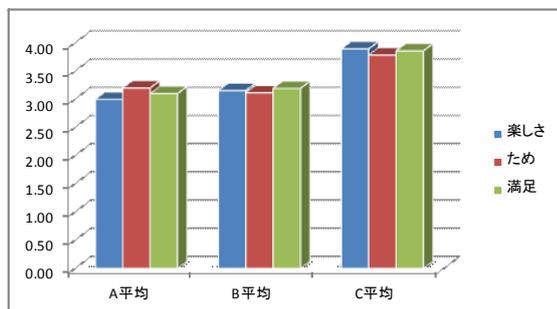
写真8 班での話し合いの様子

実践後の反省では、中心発問について児童が様々な考えを出し、主人公のアサギマダラに対する思いに迫れたのではないかという感想が出た。児童の授業後の感想からも「人と虫が友達以上の関係になることを知った。」や「(略)自然の生き物の大きな力を知った。」など多くみられ、本研究のねらいに迫る授業実践につながった。

4 評価と考察

本研究の評価として、自作資料「小さな旅人」の3グループの実践を比較する。授業後にアンケートを実施した。「授業は楽しかったか。」、「自分のためになりそうか。」、「今日の道徳の満足度。」を4段階で児童が評価した。各グループの平均はグラフ1の通りである。Aグループ

グラフ1 アンケート評価結果



からCグループまでを比較すると、コンテンツ

を使ったBグループの方の評価がAグループより高く、中心発問を再考したCグループの方がさらに評価が高くなった。また、Cグループは前時に自然に目を向ける学習も行っていることも影響している可能性が高い。これらのことから本研究で制作した自作資料は教材として十分耐えられるものであり、コンテンツを活用する方がしない方より価値に迫りやすいということ

もあきらかになった。

また、Bグループの年間の道徳の時間のアンケートを分析すると、小さな旅人の授業は「道徳が楽しい」という項目と「道徳の時間の満足度」で年間の道徳の時間の平均を若干ながら上回る結果になり、自作資料が他の資料とも同等なものであることも明らかになった。

5 おわりに

本研究では、3の視点で既存の教材を使用し、導入に工夫した実践が他にもあり、年間を通して、3の視点の指導法のひとつとして動画や画像コンテンツを併用することで効果があることが実感できた。しかし、自作資料制作の難しさもあり、納得できる自作資料はひとつしかできなかった。また、生物を撮影する技術も未熟なため児童の心に響くコンテンツ作成までまだ研究を続ける必要がある。今後もこれらの課題に対して研究を行っていく。

【参考文献】・学習指導要領道徳編 文部科学省

・心きらめく心がつむぐ兵庫のきずな兵庫県道徳副読本小学校1・2年 兵庫県教育委員会